

第3章 わかやまの自然と生活



名田から枯木灘沿岸の農漁業



園芸農業のさかんな海岸線

日ノ御崎^{みさき}から潮岬^{しほのみさき}までは、田辺湾^{たなべわん}のほかは山地が海にせまる海岸で、いたるところに海岸段丘^{かいがんだん}がみられます。特に御坊市名田^{ごぼうなだ}から印南町^{いなん}にかけては、海岸段丘が広がっています。昔は、サツマイモ・除虫菊^{じゅちゅうきく}・麦などの畑作地でしたが、1966（昭和41）年に日高川^{ひだか}から水をひく畑地灌漑^{かんがい}が完成して、キヌサヤエンドウ・レタス・スイカ・花などの栽培^{さいばい}ができるようになりました。1年を通して霜^{しも}もおりない暖かい気候であるうえに、ビニルハウスを利用していろいろな花が栽培されています。1986年ごろからは花の栽培にきりかえる農家が増えてきました。



名田の海岸段丘でのフレーム（御坊市）

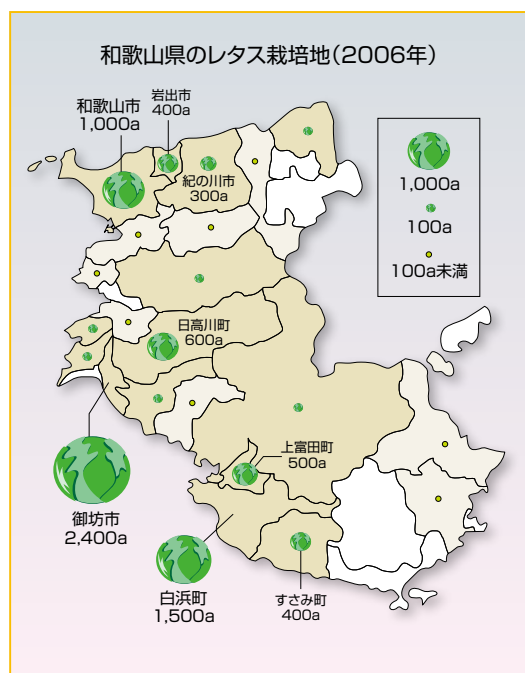
2006（平成18）年、和歌山県はスターチスの生産額が全国1位で、全国の市町村でも御坊市が1位、印南町が3位となっています。宿根カスミ草^{しゅっこん}・スイートピーの栽培も盛ん^{さか}です。



名田のスターチスの栽培（御坊市）

すさみ町は和歌山県のレタス栽培の先進地^{えすみ}で、1941年、同町の江住ではじまりました。1950年には栽培が本格化し、栽培方法の改良や販売先の拡大をはかり、1965年から十数年は生産量は増えつづけ、有名になりました。その後は、県内の各地でレタス栽培が広がりましたが、近年は減少しています。

串本町^{くしもと}ではストックの栽培が盛ん^{ひらみ}です。「平見」とよばれる平らな海岸段丘の上では、サツマイモと麦しかつくれません。そこで少しでも収入のよい作物として、1956年に和歌山^{わか}でストックの栽培がはじまり、その後、栽培の先進地であった千葉県から新たな品種を導入して栽培が安定しました。そ



*1 蚊取り線香の原料になっていた。

*2 近畿農政局和歌山農政局統計〈2008（平成20）年〉。

して、ストック栽培地は和深から潮岬・大島まで広がり、露地とハウスの組み合わせでストックを栽培し、夏小菊などもつくるようにして、紀南の代表的な産地になりました。

田辺湾・すさみの漁業

田辺湾はリアス式海岸です。湾内の田辺港は、まき網漁業が盛んな港です。また、波静かな田辺湾を利用して、早くから真珠やハマチの養殖をしてきました。その後、真珠の暴落やアコヤ貝の病気によって真珠の養殖をやめ、魚の養殖だけにしました。1960年代に入り、ハマチの養殖がはじまり、マダイ・ヒラメなどを卵から育てるようになり現在は、マダイの養殖を主に行っています。1995年には漁業協同組合の大きな市場がオープンし、白浜温泉の観光客でにぎわっています。



田辺港のまき網漁船（田辺市）

一方、すさみ町から串本町にかけての海岸は枯木灘海岸といわれています。太平洋から吹きつける潮風



田辺湾のタイの養殖（白浜町）

が強いため、海岸の樹木は枯れ木のようになっており、風をさけるための良港がありません。船人にとっては、木影のない陸路のように気の休めない海といわれてきました。

すさみ町では、明治時代の末ごろ、ぎじ針（えさにみせかけた釣針）をつけたひき縄釣りの漁業が行われるようになりました。地元ではこれをケンケン釣漁法といっています。おもにカツオ・ヨコワ（マグロの稚魚）などを釣るのです。紀南の沖合だけでなく、船団を組んで対馬（長崎県）や伊豆（静岡県）方面へも出かけています。



ケンケン船（すさみ町）

紀南の海岸美は雄大で、1970年に日本で最初の海中公園に指定されたのが串本海中公園です。このあたりの海は透明度が高く、世界でも最北限になる群生のみごとなテーブルサンゴもみられ、スキューバダイビングも盛んに行われています。また、海中展望台や全長24mの水中トンネルで海底散歩が楽しめます。このサンゴの群落は世界からも注目され、2005年に「ラムサール条約」に登録されました。

* 1 船の両側に出した竿に各3本、中に1本の計7本のひき縄にぎじ針をつけて船を走らせて釣る。魚が食いつくと潜行板が水面上がるようになっている。

* 2 世界的に重要な水辺の生態系を守るためにつくられた国際条約。第1編 第2章「わかやまの海と生きもの」31ページ参照。